

第2回 大関和、殿さまの謎の死を語る



本市(黒羽田町)出身で「明治のナイチンゲール」とも呼ばれる看護会の偉人・大関和の足跡や事績を紹介する本コーナー。今回は、和が語った大関増裕おおせきますひろの死についてご紹介します。

第1回(5月)でも少しご紹介しましたが、和が幼い頃の黒羽藩主は、藩政改革を推進し、若年寄わかどしよりや海軍奉行かいぐんぶぎょうといった幕府の要職も務めた大関増裕でした。

慶応3年(1867)12月9日、王政復古の大号令によって幕府が廃止され、新政府が誕生しました。日本史の転換点ともいえるこの日、黒羽では増裕が急死しました。金丸八幡宮(現在の那須神社)周辺で狩りをしていたところ、銃弾が顔面を貫通し亡くなったといえます。この時、増裕は30歳、和は9歳でした。

この事件については他殺説・自殺説・暴発説がありますが、和と母・哲てつは大正5年(1916)に「父から聞いたが、自殺だった」と証言しました。その内容は、大正7年(1918)に刊行された『黒羽藩戊辰戦史資料並附録』に収録されています。証言の信憑性については詳細な検討が必要となりますが、増裕は亡くなる前夜、家老の大関弾右衛門増虎おおせきだんえもんますとら(和の父親)を呼び出し、人払いをしてから次のように伝えたといえます。

「我が黒羽藩は、率先して天皇をお守りしたい。しかし、気がかりなのが会津藩だ。会津藩は朝敵となり、黒羽藩は会津討伐軍に加えられるだろう。天皇には忠義を尽くしたいが、私(増裕)は幕府の要職にあるし、兄弟と思う会津藩を攻撃するのは忍びない。そこで『臣節』(臣下として守るべき節操)を全うするため、私一人が犠牲となる。黒羽藩は、天皇に尽くして欲しい。増虎は殉死などせず、私の志を全うして欲しい。」

増裕の死後、黒羽藩は新政府軍に属して白河や二本松、会津若松などを転戦し、「臣節」を全うしました。



増裕が亡くなった時に
着ていた外套
※黒羽芭蕉の館で見学可